

インディヘニスモ作家ロサリオ・カステリャーノス

— 先住民と非先住民の溝 —

柴田修子

目次

- I はじめに
- II 生い立ち
- III 全国先住民庁時代のロサリオ・カステリャーノス：情熱と挫折
- IV 「ドン・レチャサド」にみる相互不理解
 - 1) あらすじ
 - 2) 作品世界
- V 結びにかえて

I はじめに

メキシコの女性作家ロサリオ・カステリャーノスは、メキシコはもとより欧米でも評価の高い作家であるにもかかわらず、日本ではほとんど紹介されていない¹⁾。1925年に生まれた彼女は亡くなる1974年までの間に2つの小説と3つの短編小説集のほか、多くの詩集やエッセイ集を発表しており、その作品は、「8月の招待客」、「家族のアルバム」など女性の生き方をテーマの中心に据えたものと「シウダー・リアル」、「バルン・カナン」、「闇の祈祷」など先住民社会を描いたものに分けることができる。従って彼女に対する評価も、フェミニストとしての側面を重視したものと、インディヘニスモ文学を担う作家として評価するものに二分されている。彼女の功績がどちらにも

またがるものであることは言うまでもないが、本稿では後者の側面に焦点をあて、彼女の功績を明らかにしたい。

カステリャーノス自身は、インディヘニスモ作家と呼ばれることに抵抗を感じていたようである。従来のインディヘニスモ作家を批判して、次のように述べている。

「先住民は、近寄ることのできない地域もしくはその原始性ゆえに孤立し、理解不能の方言や神秘的な宇宙観によって常に作家たちのイマジネーションをかきたててきた。しかしこうした作家たちは決して彼らに近づくことはできなかった。お決まりのセンチメンタリズム、彼らの見方をデフォルメする「お涙頂戴」を得たにすぎない。あるいは埋めようのない距離感、先住民をエキゾチックなものにしてしまう視点によって、彼らを失ったのである」⁹⁾

彼女によれば、この限界を初めて超えたのが、人類学者リカルド・ポサスであった。実在のツォツィル系先住民を主人公としてそのライフヒストリーを描いた「ファン・ペレス・ホロテ」によってはじめて先住民は客観性を与えられ、個人としての人格を持つに至ったのである。この流れを汲む作家として自らを位置づけ、その作品においては「先住民が生き、そして白人と共存している」と述べている¹⁰⁾。

文学史におけるインディヘニスモ文学としてのカステリャーノスの評価は、プリエトがまとめたものによく表れている。すなわち西洋の視点から先住民を美化し、特異な美しさを持つものとして描くのがインディアニスモであったのに対し、先住民の置かれている現実を直視しその悲惨な状況を描き出す告発小説としての性質を持つようになったのが、20世紀初頭以降のインディヘニスモ小説であった。プリエトによればそこには先住民の世界を内側から見るという視点が欠如しており、先住民自身の世界観を描ききれないという限界があった。こうした限界を乗り越え、彼らの内面を描き出すことに成功したのがグアテマラのアストゥリアスやペルーのアルゲダスであり、カステリャーノスであったのである。つまりカステリャーノスは、告発小説として

の性質を持つインディヘニスモ小説が内包していた限界をつきやぶることに成功した作家ということができる⁴⁴。

しかしカステリャーノスの功績は、先住民の世界観を忠実に描き出したことにとどまるのではない。先住民社会と非先住民社会に深く開いた溝、すなわち相互不理解というメキシコ社会のもっとも深刻な問題を浮かび上がらせていることに彼女の真骨頂がある。それは社会構造そのものに内在する問題を的確に表現しながらも、先住民を単なる被害者として美化することなく、生身の人間として描くことによって生まれる世界である。その作品は文学としてすぐれていることにとどまらず、社会を映し出す鏡となっているのである。本稿では、彼女がいかにしてこうした視点を得るに至ったかを明らかにするため、まず彼女の生い立ちと、先住民観を形成する上で重要な影響を与えたと考えられる全国先住民庁時代の活動を追う。そして短編「ドン・レチャサド」をテキストに、彼女の作品世界に現れる先住民と非先住民の関係性を明らかにしたい。

II 生い立ち

ロサリオ・カステリャーノスは、1925年メキシコシティに白人家庭の長女として生まれた。父セサル・カステリャーノスはメキシコ南部のチアパス州コミタンの農園主であり、生後まもなく一家はチアパス州に移り、コミタンで育った。彼女の一年後に弟マリオ・ベンジャミンが生まれたが7歳で死亡。一家の後継者として期待されていた男児だっただけに両親の悲嘆は大きく、母は「どうせ死ぬなら娘のほうが死ぬべきだ」と泣き崩れたといわれている⁴⁵。両親はこの衝撃から立ち直ることができず、彼女をかえりみるのがほとんどなかったため、実質的に彼女はルフィーナという先住民の乳母に育てられた。自分の資質と関わりなく、男性に生まれなかったというだけで両親の愛情を得ることができず、どんなに努力しようと事態を変えることに貢献することもできない。弟の死は彼女にとって女性であるが故の孤独の始まりであった。その感覚は終生彼女をとらえ続け、生まれ故に不当な扱いを受

ける先住民に対する共感につながっていくことになる。

1941年セサルの農園の接収を機に、一家はメキシコシティへ移住する。1917年にメキシコ革命の成果である革命憲法が制定されて以後、各地で農地改革が行われてきたが、反革命派が勢力を握っていたチアパス州で農地改革が断行されたのは、1934年にラサロ・カルデナスが大統領に就任してからのことである。1930年までに同州で分配された土地は約4万6,000ヘクタールに過ぎなかったが、1930年から1940年までに分配された土地は約28万ヘクタールにのぼっている⁶⁾。セサルは反カルデナス派を形成するコミタンの有力者であったため、その農園の一部が接収された。とはいえこの時期チアパス州の白人層の移住は、めずらしいことではなかった。チアパス州の古都サン・クリストバル・デ・ラス・カサス（以下サン・クリストバルと略す）の変容を研究したサンチェス・フロレスによれば、カルデナス期以降、白人の移住が相次いだが、移住の理由は革命の影響が州に及んだことによる経済変革だけでなく、これまで別世界にいたはずの先住民が自分たちの領域に入りこんでくることに恐れをなしたことによる場合もあったという⁷⁾。セサル一家の場合も、接収された農園は一部にすぎず、シティ移住後、生活に困窮したというわけではなかったようである。ロサリオの大学時代の友人は、カステリャーノスが所有していたフォード車に乗せてもらうのが楽しみだったと回想している。

1944年メキシコ国立自治大学文学部に入学、1950年に同大学で文学修士号を取得している。大学在学中の1948年、母と父を相次いでなくし、天涯孤独の身となった。修士号取得と同時にヒスパニック文化協会の奨学金を得て、スペインへ留学した。帰国後彼女はチアパス科学芸術院の文化振興プロモーターとして故郷チアパス州に赴任する。元同僚の回想によれば、仕事は図書館の管理であり、すでに詩作活動を始めていた彼女の本に対する情熱は相当なものだったようである。

「彼女は我々の図書館の蔵書が少ないのを嘆き、自分の本を寄付するようになった……（彼女が体を壊して入院している間に）彼女が集めた本

を校長が処分するように命じた。それを病院で聞いたロサリオは、怒って泣いていた」⁸⁾

体調を崩した彼女はいったんシティに戻って療養した後、1956年再びチアパス州に戻ってくる。今度は直接先住民のために働くことが目的であり、全国先住民庁の職員としてサン・クリストバルに赴任した。ここでの経験が、作品世界を構築する上で大きな影響を及ぼしたと考えられる。チアパス州を舞台にした最初の長編「バルン・カナン」はこの時期に書かれており、後に紹介する短編集「シウダー・レアル」はサン・クリストバルの旧称である。全国先住民庁時代のカステリャーノスについては次の章で詳しくみることにして、まずはその生涯を追っておくことにしよう。

1957年母校であるメキシコ国立自治大学文学部の教授に迎えられ、シティに戻る。その後同級生だったリカルド・ゲラと結婚、長男ガブリエルをもうけるが、まもなく離婚し、女手一つで息子を育てた。1966年大学内部の紛争が原因で文学部を退職、米国に渡ってウィスコンシン大学で一年間中南米文学の講義を担当した。1971年にイスラエル大使に任命され、同地に赴任、文化交流事業を積極的に進めたが、1974年不慮の事故によりテル・アビブの自宅で死亡した。存命中から彼女に対する評価は高く、1958年チアパス賞、1961年ハビエル・ビジャウルティア賞、1962年ソル・フアナ・イネス・デ・ラ・クルス賞、1967年カルロス・トゥルイェット文学賞、1972年エリアス・ソウラスキー文学賞などさまざまな賞を受賞しており、短いながらも充実した文学人生だったと言えるだろう。

Ⅲ 全国先住民庁時代のロサリオ・カステリャーノス： 情熱と挫折

ロサリオ・カステリャーノスが全国先住民庁にいたのは1956年から1957年までであり、決して長くはない。しかしこの1年間の体験が、彼女独自の先住民観を作り上げたといっても過言ではない。ここでは、全国先住民庁での活動を通して、どのような先住民観を持つに至ったかを明らかにしたい。

全国先住民庁は、先住民が抱えるさまざまな問題に対処するために1948年に設立された大統領の直轄機関である。チアパス州では1951年サン・クリストバルに最初の調整センターが設置され、州内で先住民居住率が高かったチアパス高地の先住民を対象として教育の充実、農牧業支援、保健衛生の改善が図られることになった。当時の対先住民政策の理念は、「文化的・技術的に後進的である先住民を、諸政策を通じてメスティソ（混血）化することで、近代国家メキシコに統合する」というものであった。これを実行する機関として設けられたのが全国先住民庁である。そこにあるのは、先住民を「劣った、教化すべき存在」とする視点のみであり、先住民自身が主体としてとらえられることはなかった。政策実行過程においてはしばしば村の有力者との癒着がみられ、カシケ（地方ボス）層の形成を助長することになった。人類学者ワッシャーストロームは、1952年からチアパス高地に教師、保健衛生指導員の派遣が開始されたものの、その利益は一部の特権階級に握られていたと指摘している⁹⁾。

とはいえ、1950年代当時、先住民問題を扱う唯一の政府機関だったのであり、カステリャーノスは理想に燃えてサン・クリストバルに赴任した。ここで彼女は教育プロジェクトの一員として、「ペトゥル劇団」の運営を担当した。ペトゥル劇団は、先住民の教化のために全国先住民庁の職員たちが考案した人形劇である。ペトゥルとその友人スムが日常のさまざまな問題について話し合うという形式で物語が進行し、2人の掛け合いのなかでにわたりの病気の治療法やシラミの退治法などを紹介することで、チアパス高地の村々に対する情報提供や技術普及を図った。カステジャーノスが脚本を書き、通訳がそれをツォツィル語やツェルタル語に翻訳した。

その一方で、先住民向けの教科書も執筆し、教育の普及に努めた。教科書のなかにも、彼女独特の視点を見て取ることができる。例えば憲法を紹介した本では、「法の下での平等」について次のように表現している。

「ある人、例えばあなたはツェルタル語やツォツィル語を話すでしょう。スペイン語を話す人もいます。色の黒い人もいれば白い人もいます。あ

る人は自分の習慣に従って暮らし、ほかの人はほかの習慣に従って暮らしています。でも憲法の前では、だれもみな同じ権利と同じ義務を持っているのです。なぜなら私たちはみな同じメキシコ人だからです」⁹⁰

彼女自身は裕福な白人家庭の出であるが、彼女にとって先住民は常に強者と対峙することを運命づけられた存在という意味で、女性である自分と同質のものを持っていた。この文章には彼らに対する共感、生まれに関係なく相手と同じ立場に立てるべきであるという思想が込められている。

彼女の活動について元同僚は次のように回想している。

「谷を降りたり狭い山道をよじ登ったり、村から村へと山を歩き回りながら日増しに謙虚に仕事をして、ロサリオのいったいどこからそんなエネルギーがわいていたのか？ きつい仕事をこなすあの細い女性は、なにに支えられていたのか？ 情熱だ。彼女の元気は情熱からきていた。役に立ちたい、学びたい、伝えたいという情熱だ」⁹¹

しかし彼女がいくら先住民のために尽くそうとしても、それは想像以上に困難であり、砂に水をまくような作業であった。情熱はしだいに焦燥に変わっていく。思いが伝わらない焦燥感を、彼女は後に次のように語っている。

「どうやったら彼らに近づいて、彼らを悲惨な状態に閉じ込めている殻を突き破り尊厳の記憶を取り戻すことができるのか知っていたらいいのに！ そして頭をもたげさせ、気持ちを奮い立たせ、平等という名の未知の領域できびきびと動き回らせることができたらいいいのに」⁹²

そしてこの焦燥はしだいに挫折感につながっていく。全国先住民庁での仕事は彼女に満足感をもたらすことができなかった。それは先住民に思いを伝えることの難しさのみならず、全国先住民庁の体制そのものに対する失望感でもあった。

「私は自分にはできるのだと辛抱強く思うことで、希望を持ち続けてきた。幾多の幻滅には耐えられるつもりでいた。しかしここで私が目にしたものは、私の悲観的な予想をはるかに越えていた……それはたかり屋を誉めそやし、凡人を高い地位につけ、弱者を踏みつけにする腐敗し

きった権威である。気違いじみたきまぐれで変更される法である。全国先住民庁が援助を約束した者たちの利益を優先させるような、一部の限られた個人の利害である」⁹⁹

理想に燃えてサン・クリストバルにやってきた彼女の前に立ちはだかっていたのは、自分の思いを理解しようとしめない先住民であり、多くの白人の無理解・無関心であり、一部の利害を優先させる全国先住民庁の腐敗体質であった。こうした現実が彼女に他者と関わることの難しさを教え、それでもなお理解する努力を続けることの必要性を教えた。1年後彼女はチアパス州を去り、メキシコシティで教職に就く。先住民に対する共感はその後、文学を通じて開花することになる。彼女の作品世界が、会話の不成立をありのままに描き出していることには、全国先住民時代の情熱と挫折が大きく影響を及ぼしているといえるだろう。

カステリャーノスの描く先住民は、差別的な社会構造のなかに身を置きつつも、彼らなりの論理を貫いて暮らしていく強さと弱さを兼ね備えた存在である。彼女の先住民観は、次の言葉によく表れている。

「先住民？ 私たちにとって不思議な存在？ そう。でも結局のところ、究極的にはどこにでもいる人間にすぎない。……一見犠牲者役が先住民であり、もう一方（白人社会）が悪役に見えるかもしれない。しかし人間関係というものはそう簡単にわりきれるものではなく、まして社会とくればなおさらである。仮面は変化し、ときに役は入れ替わる」¹⁰⁰

カステリャーノスは先住民を取り巻く構造化された差別を明らかにしているが、彼ら自身を必ずしも哀れな被害者として扱っているわけではない。むしろ彼女が伝えようとしているのは、ごく当たり前の人間の営みであり、彼女が属する白人（非先住民）社会と本質的にはなんら変わらないのだということである。次章で、彼女の作品のなかで先住民、非先住民がどのように描かれているか、両者の関係性を見ていくことにしたい。

IV 「ドン・レチャサド」にみる相互不理解

1) あらすじ

これは「シウダー・レアル」に収められた一編である。「シウダー・レアル」は1960年に発表された短編集で、チアパス州の古都シウダー・レアル（現在のサン・クリストバル）を舞台に、分不相応な大金を拾った先住民の男や財産を守るために殺人すら辞さない非先住民女性など、さまざまな人々の人間模様が描かれている。

物語は理想に燃える文化人類学者ホセ・アントニオ・ロメロがシウダー・レアルに赴任したところから始まる。彼がこの町で起こった「ある奇妙な出来事」を一人称で読者に語るという形式で、物語が進んでいく。彼はこの町の先住民救済ミッションという政府機関で、先住民に関するあらゆる問題に対応するために日々奔走している。ある日彼が露天商や物売りがひしめくなか愛車のジープを走らせていると、突然車の前に先住民の娘が飛び出してきた。最初は腹を立てたものの、その娘にふと同情を感じた彼は、「物乞いに断固反対で、小出しの善意は効果がないという信念を持っている」にもかかわらず、娘に小銭を渡してやろうとする。彼女はそれを受け取るかわりに彼をわき道の奥へと連れていく。そこで彼が見たものは、産後の生々しい臭いが漂うなかに倒れている先住民女性と赤ん坊だった。彼女の母親らしい。彼は3人をジープに乗せて連れかえり、ミッションで面倒をみる決心をする。

同僚たちの理解と同情を得て、母子はミッションの施設で暮らすことになった。「自分たちの琴線に触れたものにはやさしくなれる」同僚の妻たちが、必要なものを取り揃えてくれた。主人公は母子の言葉であるツェルタル語を話すことができなかったが、メイドの通訳によってこの家族の不幸のあらましを知ることになる。母親の名はマヌエラ、妊娠数ヶ月で未亡人となり、夫の借金をかかえたまま住む場所を失った彼女は、町の安宿で住みこみ女中として働くことになった。ドニャ・プラヘダという名の女主人は、使用人に対する過酷な仕打ちでよく知られていた人物である。マヌエラが産気づくと、

ドニャ・プラヘダは彼女を馬小屋に閉じ込めてしまう。そしてお産を済ませた彼女が産褥熱にかかっているの知るやいなや、一家を道に放り出した。途方にくれた一家に誰かがミッションに行くことを勧め、ミッションのマークの入ったジープを見つけた娘が、車の前に飛び出したというわけだった。

ホセは一家の行く末を案じ、娘を寄宿学校に入れることを提案する。そこで読み書きや文明人としての習慣を身につければ、村に戻ったときにきちんとした仕事を得られると考えたからだ。すばらしいことを思いついたつものホセに対し、マヌエラの反応は冷たく、赤ん坊を抱きしめるだけでなにも答えようとしな。働き手としての娘を失うことを恐れているのだろうと考えた彼は、学校にいるあいだ娘に給料を払うことを申し出る。ところがマヌエラの反応はまたしてもホセの予想を裏切るものだった。彼女の通訳は彼にこう伝える。「娘を買って愛人にしたいのなら、瓶一杯分の酒ととうもろこしを二袋よこせと言っています。それ以下では娘はやらないそうです」⁹⁹ホセにはこの条件を受け入れることはできない。条件を認めることは、彼やミッションの活動目的を否定することであり、ほかの白人と同じように先住民をいやしめることになるからだ。

いつまでも平行線をたどる議論に疲れ果て、娘を学校に入れることをあきらめたホセは、次の作戦に移る。自分の善意を相手に理解させるため、赤ん坊の名付け親になることで相手の信頼を勝ち取ろうとするのである。なかなか心を開こうとしないマヌエラの気をひこうと、プレゼント攻勢にはじまり、産湯のつきそいやおむつの交換まで手伝って友好関係を築こうと努める。機が熟したかにみえたある日、マヌエラに名付け親の一件を切り出した彼は、またしても期待を裏切られることになる。マヌエラにとって、赤ん坊の名付け親は最初から決まっているというのだ。ドニャ・プラヘダだという。ショックを受けた彼が理由を問いただすと、マヌエラは「彼女との契約は切れておらず、彼女が自分の主人だからだ」と答える。病気が治ったマヌエラは子どもたちを連れてミッションを去っていく。行き先はもちろんドニャ・プラヘダのところだ。以後町でばったり会うことがあっても、彼女は挨拶もせずに

目をそらす。彼の親切を無駄にしたことへの恥じらいではなく、彼に危害を加えられるのではないかという恐れからだ。結局お互い理解しあうことのないまま、物語はホセの次のような独白で終わる。「私は教えてもらいたい。専門家として、人間として私はなにか間違っていただろうか？ なにかがあったに違いない。彼女たちにしてやれなかったなにかが」⁹⁹

2) 作品世界

主人公ホセが属している先住民救済ミッションは、カステリャーノスが在職していた全国先住民庁のことであり、若い情熱を持って赴任してくる主人公の姿は、彼女自身と重なるところがある。ホセは、彼女の作品にしばしば登場する傲慢な白人とは異なり、先住民を救済したいと考えている良心的な人物である。彼の理念は、近代的な進歩主義、合理主義に基づいている。すなわち、彼らの生活を向上させるためには、単なる援助ではなく教育の普及など根本的な対策が必要であり、センチメンタリズムに基づくその場しのぎの施しには意味がないという立場である。そうであるにもかかわらず、彼は結局先住民マヌエラ一家を救うことができないまま物語は終わる。その背景として彼のなかにある同情心と優越感、相手に対する無理解が浮かび上がってくる。

彼の同情と優越感は「施し」をめぐる彼の態度によく表れている。彼がお金を出そう（もしくは出す）とする場面は3ヶ所ある。一つ目は娘をはねそうになったときであり、2番目はミッションで引き取って必要なものを買って与える場面であり、3番目は娘を寄宿舎に入れることをしぶられたときである。普段は施しに批判的であるにもかかわらず、なにか問題が起こるとお金を解決の手段にあててしまう。彼自身はセンチメンタリズムを嫌悪する合理主義者のつもりであるにもかかわらず、悲惨な現実を前にしてつい同情を感じ、本来批判しているはずの行動をとることになるのである。同情は哀れみでもある。彼は自分のなかにあるこうした感情をうち消すかのように、自らの行為に合理的説明をつけようとする。

「お金はどうしたかって？ 自腹を切ったとも。こんなことまで言うのは、くだらない誉め言葉がほしいからではない。つつみ隠さず語ると約束したからだ。そもそも誉められるようなことだろうか？ 私は十分な稼ぎがあって独身だし、ここではお金の使い道がない。貯金はたまる一方だ。そして私はその女に健康になってもらいたかったのだ」⁹⁷

この矛盾は、彼らの生活を向上させたいという熱意の下に、非先住民としての優越感がぬぐいがたく存在していることによるものである。彼の抱く優越感は、教育観から読み取ることができる。彼にとって教育は根本的な対策の一つである。先住民の貧困は教育の不足に起因するものであり、しかるべき教養と知識を身につけさえすれば、職を得て生活を向上させることができるはずだというのが彼の論理である。興味深いのは、学校に行けば「文明人としての習慣や必要なこと」を身につけられると考えている点である。彼は先住民に同情的で、彼らのために尽くそうとめざしている良心的な白人であるにもかかわらず、その根底には先住民=非文明人、非先住民=文明人という意識がある。先住民は教化すべき存在であって、なにかを学ばせてくれる存在ではない。彼らの文化を尊重しようという気持ちはないのである。ホセにとって先住民とはあくまで救済の対象であり、相手に敬意を払って対等な人間としての関係を築くことは最初から頭がない。

ホセが一家に親切にする理由は、なによりもまずその境遇に同情したからであるが、その根底には自らの行動の意義を、相手の理解を得ることによって再確認したいという意図が隠されている。無自覚であった彼の意図は、マヌエラの拒絶によってしだいに明らかになっていく。最初彼は善意から寄宿学校の提案をするが断られてしまう。そこで給料を払うことを申し出ると、それをマヌエラは娘を買い取ることだと解釈する。娘を差し出す条件として彼女が提示したものはささいなものだった。しかし彼は次のように告白する。

「おそらくはこの申し出を受けるほうが現実的だっただろう。先住民のあいだではこれが当たり前であって、マヌエラにはごく普通の罪のないことに思えただろうから。だが私は、自分自身とミッションのため、我々

の目的を明らかにすることにこだわった。我々の任務はシウダー・レアルのほかの白人たちのように先住民をいやしめ、搾取することではなく、娘に教育の機会を与え生活を向上させることが我々の望むことなのだ¹⁰⁰。一家の生活向上を第一に考えるならば、その条件に従うことがもっとも有効な手段であったに違いない。だがホセにはどうしてもマヌエラの条件を受け入れることができない。なぜなら、これを受け入れれば自分自身が、ふだん批判しているはずの白人たちと同じ行為をすることになるからだ。彼にとってもっとも大切なことは、ミッションおよび自分の役割を明らかにすることにある。自分たちは先住民に貢献しようとしているのであって、搾取の対象にしているわけではないことを相手に理解させることのほうが、現実に対処するよりも重要なのである。

一方マヌエラは、ホセの理念にはまったく関心がない。彼女にとって非先住民とは搾取者であり、良心的な白人とそうでない者とを区別する必要はないのである。従って彼女のなかではホセもミッションの職員もドンニャ・プラヘダもみな同列に扱われる。ホセがこれまでの白人とは違った言動をとることが彼女には理解できず、むしろ不気味な存在ですらある。彼女にとっては、見返りを求めずに親切心を示す白人より、関係性が明確なドンニャ・プラヘダのほうが安全なのである。彼女の持つ白人像の枠外に位置する白人と対峙するとき大切なことは、最初に交渉し、被害を最小限に食い止める努力を怠らないことである。そして利用できるところはなるべく利用する。心を許して相談するという選択肢は、彼女のなかには存在しておらず、心開いてほしいというホセの希望がかなう日は永遠にこないことが、名付け親の一件で明らかにされる。白人に酷使されてきた哀れな境遇であるはずの先住民も、自らの論理に従って抜け目なく生活を送っている点で、白人と変わらないのであり、両者の関係性は逆転可能なものである。マヌエラ一家を助けたいという善意を持ちつつも、その根底に優越感、無理解を抱え込んでいたホセと同様、マヌエラも相手を理解しようとしなない。そして病気のあいだホセの善意を利用し、働けるようになると逃げるようにしてドンニャ・プラヘダのどこ

ろに戻っていく。ホセは誰かを助けたという充実感さえ与えられることがなく、無理解の壁だけが残される。

V 結びにかえて

これまでみてきたように、カステリャーノスはその作品のなかで、先住民を忠実に描き出すことにとどまらず、先住民と非先住民の相互不理解という現実を提示した。彼女の先住民に対する共感、先住民の乳母に育てられた少女時代にはぐくまれ、女性であるが故の疎外感から、自らの問題として内在化された。さらに全国先住民庁時代の経験から、現実を見据える眼を持つに至ったといえるだろう。ホセの抱えた矛盾は、カステリャーノス自身が体験した心の葛藤だったのである。彼女の視点はどちらか一方に注がれているわけではなく、どの人もそれぞれの価値観に従って懸命に生きているにすぎないのだということが、淡々とつづられていく。しかし価値観の相違はときに救いのない悲劇を生み出し、両者の政治・経済的な力関係に圧倒的な違いがあることから、その相違は差別的な社会構造として固定化される。真の悲劇は、どちらかが優れているか否かにあるのではなく、相互不理解にあることが、その作品から浮かび上がってくる。本稿で紹介した「ドン・レチャサド」の主人公ホセは、先住民と非先住民の関係性を搾取者—被搾取者ととらえ、近代的な合理主義に基づいてこれを変革しようと努める点で新しいタイプの非先住民であったが、相手の声に耳を傾けるという姿勢に欠けていたため、結局最後まで理解し合うことができない。とはいえ、なにかが欠けているに違いないと気づく結末にかすかな希望が残される。

カステリャーノスの没後30年近く経過したが、彼女は決して過去の作家ではない。なぜならこの相互不理解は、現在までメキシコが抱えている課題であるからだ。それを象徴する出来事が、1994年にチアパス州で起きたサパティスタ民族解放軍（EZLN）の武装蜂起である。先住民の権利を掲げたEZLNの主張はメキシコで大きな支持を集め、その後社会運動として全国に広がった。度重なる交渉と決裂の繰り返しの末、2001年政府はEZLNの主張する

先住民自治を法律化することを約束したが、国会可決直前に内容を変更したために可決法案に対する抗議の声が全国の先住民グループから挙がり、EZLN と政府の対話は再び決裂したまま現在に至っている。武装蜂起とその後の交渉過程は、政府と先住民社会との不理解の壁が今なお乗り越えがたいものであることを物語っている。

注

- (1) 日本におけるロサリオ・カステジャーノスの数少ない研究として、高林則明「文学のなかのインディオの家族像——ロサリオ・カステリャーノスにみる女性と家族」三田千代子・奥山恭子編『ラテンアメリカ 家族と社会』（新評論 1992年）等がある。
- (2) Castellanos, Rosario. 1984 (first edition: 1966) *Juicios sumarios I*. México: Fondo de Cultura Económica. pp. 121-122
- (3) *Ibid.* p. 122
- (4) Prieto, René. 1996. "The literature of indigenismo" in *The Cambridge history of Latin American literature vol. 2*. ed. by Roberto Gonzalez Echeverria et al. Cambridge: Cambridge University Press.
- (5) カステリャーノスの生い立ちや弟の死については、自伝的小説「バルン・カナン」に詳しい。(Castellanos, Rosario. 1995 (first edition: 1957). *Balún Canán*. México: Fondo de Cultura Económica.)
- (6) Reyes Ramos, María. 1992. *El reparto de tierras y la política agraria en Chiapas 1914-1988*. México: Universidad Nacional de México. p. 133
- (7) Sánchez Flores, Magdalena Patricia. 1995. "De la ciudad real a la ciudad escaparate" in *Chiapas: una modernidad inconclusa*. ed. by Diana Guillén. México: Instituto Mora. pp. 73-74
- (8) Zepeda, Eracio. 1978. "Recuerdos de San Cristobal: palabras en la fiesta" in *México indígena: INI 30 años después, revisión crítica*. ed. by José Carreño Carlon. México: Instituto Nacional Indigenista. p. 186
- (9) Wasserstrom, Robert. 1989. *Clase y sociedad en el centro de Chiapas*. México: Fondo de Cultura Económica. p. 212
- (10) Castellanos, Rosario. 1970. *La constitución*. México: Instituto Nacional Indigenista. p. 3
- (11) Zepeda. 1978. op. cit. p. 186
- (12) Franco, María Estera. 1989. *Otro modo de ser humano y libre: sembranza*

- psicoanalítica de Rosario Castellanos*. México: Plaza y Valdes. p. 134
- (13) Megged, Nahum 1994. *Rosario Castellanos: un largo camino a la ironía*. México: Colegio de México. p. 43
- (14) Castellanos. 1984. *op. cit.* p. 122
- (15) Castellanos, Rosario. 1997 (first edition: 1960). *Ciudad Real*. México: Alfaguara. p. 139
- (16) *Ibid.* p. 141
- (17) *Ibid.* pp. 134-135
- (18) *Ibid.* p. 139